【論　文】

「オデュッセイア」におけるパイアクス人物語

松本仁助

本論は、「オデュッセイア」全体の筋の展開との関連から、五―一三歌の部分を統一論的に解釈するものである。

I

1　オデュッセウスのオギュギアからの出発

「オデュッセイア」一、七五―七九において、神々によってオデュッセウスの帰国が決定されるようになり、またそのことをカリュプソにつたえにヘルメスを派遣することがアテネによって提案された。しかしそれが実行されるのは、五歌における第二の神々の会議でゼウスがヘルメスに、「ヘルメス、おまえは他のことにおいても使者であるから、われわれの明確な決定を巻き毛の美しいニンフに告げよ。忍耐強いオデュッセウスが帰国の途につくということを(五、二九―三一)」と命じてからである。この点をとらえ、すでにキルヒホフは[1]、本来は一、八一―八七におけるア

テネの提案をゼウスがうけいれ、その場でただちにヘルメスに命令を与えていたことを証明しようと努力している。まだヴィラモーヴィッツ[2]は五歌の第二の神々の会議を第一の神々の会議の補完と見ている。さらに近年ではシャーデヴァルト[3]が、現形の「オデュッセイア」は本来の筋をさかれており、作者Aの「オデュッセイア」すなわち本来の「オデュッセイア」には一つの神々の会議しかなく、その会議では、ゼウスがアテネの提案にただちに対応してヘルメスに命令を与えていることを証明し、本来の「オデュッセイア」における筋の統一を再構できると主張している。以上のような分析論者による批判のように、一歌におけるアテネの提案が五歌においてやっと実行に移されるということが、はたして不自然なことだろうか。

アテネは、一歌において、自分がイタカへいき、求婚者たちに思うことを言うようテレマコスを勇気づけ、ピュロスとスパルタへオデュッセウスの消息を尋ねにいかせて、名誉を得させるようにしよう（一、八七―九五）と言ったあと、ただちにイタカに現われ、提案にしたがった行動をとり、その結果一歌から四歌にわたる事件がおこっているのである。ところでアテネがこの事件を要約し、しかも思いどおりに事が運ばなかったと嘆いているのが、「父ゼウスおよび至福な永遠の神々よ、笏をもつ王は、もはや親切でも寛大でもなく、正義に通じる必要もない。いつも冷酷で無法なことをしておればよいのだ。神のようなオデュッセウスが父親のように温かく支配していた人々のうち誰一人として彼のことを思わないのだから。ああ、彼はニンフのカリュプソの島にいて、ひどい苦しみをうけながら彼女の館に無理にひきとめられている。彼は自分の祖国に帰れない。というのも彼にはオールのある船もなく、海の広い背を越えて彼にしたがっていく乗組員もいないのだから。また一方彼ら（ペネロペイアの求婚者たち）は、帰路につく息子（テレマコス）を殺害しようとさえしている。彼は父の消息を尋ねに聖なるピュロスと崇高なラケダイモンへいっ

たのだ（五、七―二〇）」という言葉である。

この五、七―一二で、イタカの住民が、テレマコスの呼びかけに蜂起しないばかりか、求婚者たちがテレマコスを待伏せ、帰路において彼を殺害しようとしている故、一三―一七においてオデュッセウスの現状を述べているのは、一刻も早く彼を帰国させてほしいというアテネの願いにほかならないと言えるだろう。つまりテレマコスの運命の変化が、一歌におけるオデュッセウスの帰国の問題をここで再度ひきだすことになり、それがアテネの願いになったと見うる。したがって一歌からすでに事件の基底に存在していたイタカにいて父を求めるテレマコスとオギュギアにいて帰国を望むオデュッセウスの両者により求められる目に見えぬ絆が、筋の展開とともにより強まったことを五歌におけるアテネの言葉（七―二〇）によって作者がしめそうとしているのも当然のことと言ってよいだろう。④

さてこのアテネの願にたいして、ゼウスは、「オデュッセウスが帰国して彼ら（求婚者たち）を罰するという考えは、お前自身が助言したのではなかったのか（五、二三―二四）」と言い、さらに「テレマコスが無事に帰国でき、求婚者たちが目的をはたさずに舟を帰すように、お前自身が思慮深くつきそってやれ、お前にはそれができるのだから（五、二五―二七）」と述べ、さらにオデュッセウスを帰国させることを神々が決議しており、オデュッセウスは筏で二十日目に神々と血つづきであるパイアクス人たちの肥沃な土地スケリアに着き、そこで多くの贈物を得て、彼らに船で故郷へ送りかえしてもらい、彼の親しい人々にあう運命なのだ（五、二九―四二）ということをカリュプソにつたえるようヘルメスに命じ、オギュギアにいかせている。

ところでここでまず気づくのは、ゼウスが求婚者たちにたいする復讐に言及していることである。分析論者たちはこれを改作者による挿入と見ている。しかしオデュッセウスが帰国すれば求婚者たちが復讐されるということは、一

歌において（二五二―二五三、二六五―二六六）のみならず、三歌において（二一六―二二四との関連から二三一で）もアテネ自身によって述べられている。一方、二歌においては、ハリテルセスがオデュッセウスの帰国と求婚者たちにたいする復讐を予言している（一六三―一六六）。それ故、五歌の時点で、求婚者たちにたいする復讐は自明のことであり、しかもさきにもふれたように、イタカの状況は、求婚者たちに復讐することによりイタカを救済する者としてオデュッセウスを緊急に帰国させることを必要としているのである。いやむしろオデュッセウスの帰国は、三歌、四歌において述べられたアガメムノンの悲惨な死を考慮すれば、求婚者を殺害することによってはじめて成就されるのではなかろうか。このように見てくると、ゼウスが、オデュッセウスのみならず、求婚者にたいする復讐もアテネの考えと見なして発言しているのは、けっして不自然なことではないだろう。またゼウスによって、このようにオデュッセウスの復讐が明らかにされたことは、テレマコスも、アテネによって、求婚者たちを殺害して仇を討つようはげまされているのだから、父と息子の目的が一致しており、彼ら二人により求婚者たちが殺害された後はじめてオデュッセウスの帰国が成立するという筋の見通しがしめされていると言えるのではなかろうか。さらにテレマコスの危機について、アテネガ彼を助けて無事に帰国させるようにとゼウスが述べているのも、以上の筋の見通しからして当然の発言であろう。[5]

このように見てくると五歌における第二の神々の会議は、分析論者たちが批判するような矛盾したものではなく、第一の神々の会議および四歌までの筋の展開と有機的な関連を有していることがわかるだろう。[6]

II

さてゼウスの使者として、ヘルメスは、大海を飛び越えてカリュプソの島に着いた。女神は大きな岩屋のなかに住んでいた。ヘルメスはその岩屋の前に立って、島の美しい景色を十分に眺めたあとで、そのなかへはいった。ヘルメスは、彼女から酒食のもてなしをうけた後、神々の決定としてゼウスの命令すなわちオデュッセウスを帰国させることを彼女につたえた。これを聞くとカリュプソは腹をたて、男の神々は女神が人間と寝床を一緒にすれば嫉妬すると言って非難し、自分はオデュッセウスを助け、面倒を見、不老不死にしてやるつもりでいるという気持まで彼に打ち明けているのにと嘆くが、ゼウスの命令にそむくことはできないと言って、彼に無事に帰国する方法を教えてやると約束した。これを聞いてヘルメスは、ゼウスにそむいて怒りをかわないようにと、彼女に念をおして、立ち去った（五、四三―一四八）。

このあとカリュプソは、オデュッセウスを探しに出かけた。彼は浜辺に坐り故郷をあこがれて涙を流していた。彼の心には、もはや女神への愛はなく、彼は心にもなく女神に添い寝しているのである。このような気持で坐っている彼のそばに彼女は近づき、彼を無事に帰国させるという神々の決定をつたえた。オデュッセウスは、カリュプソの言うことを信用せず、悪巧みをしないという誓いを要求した。彼女はその誓いを立て、自分の心は鉄ではなく、憐れみも知っているのだと言った。そして彼女は彼とともに岩屋にはいり、彼は人間の食事を、彼女は神の食事をすませた。このあとカリュプソは、もう一度オデュッセウスに、人間として帰国するより、自分と一緒に不老不死の生活を送る意志はないのかと尋ね、自分のほうがペネロペイアより美しいではないかと強調した。これにたいしてオデュッセウスは、彼女がペネロペイアより美しいことはよくわかっているが、それでもなお帰国を願っていると言い、帰途に出あうどんな苦難にも耐えて見せるとその強い意志を表明した。[7] しかしその夜も彼は彼女と寝床をともにした（五、

一四九―二二七)。オデュッセウスの苦難にみちた帰国が「オデュッセイア」の主題であるからには、こうして作者が、神々の不死の生活よりも、死すべき人間の生活をオデュッセウスに選ばさせているのも、筋の展開から見て当然のことであろう。[8]

さてオデュッセウスは、翌朝よりカリュプソから与えられた大斧と錐を使って筏を造り、カリュプソは、帆にする布を造った。彼はそれを帆にし、帆柱に張った。これらの作業は四日目に終った。五日目にオデュッセウスは、カリュプソに身体を洗ってもらい、衣服を着せてもらった後、島から出発した。彼は、カリュプソに言われたとおり、オリオン星座を左手に一七日間航海し、一八日目にパイアクス人たちの土地の山を見るところまできた(五、二二八―二八一)。

しかしその時、エティオピアからの帰途にあったポセイドンが、スケリアに近づくオデュッセウスを見つけ、神々が自分の留守の間にオデュッセウスの帰国を決めたのを察し、オデュッセウスがスケリアに着くまでは苦しめてやろうと、嵐を吹かせ、大波をおこした。この大波にオデュッセウスは筏からほりだされ、帆柱は折られ、帆とともに海に落ちた。海になげだされたオデュッセウスは、筏に泳ぎついたが、その筏も、大波に翻弄された。このようなオデュッセウスを、女神イノ・レウコテアが哀れみ、波間から彼におよそつぎのように言った。ポセイドンが彼に腹を立てているのだろうが、彼を殺してしまうことはできないだろう。着物を脱ぎ、筏をすて、彼女のヴェールを胸の下にまきつけて、パイアクス人の土地へ泳ぎつき、陸地にあがると、このヴェールを海に投げこむようにと。だがヴェールをうけとったオデュッセウスは、筏をすてよというのは神の悪巧みではないかと思い、筏がしっかりしている間は筏に乗っており、筏が波にくだかれると、泳ぐことにした。だが彼がこのように決心したとたん、大波が筏の材木を

ばらばらにした。そこでオデュッセウスは、着物を脱ぎすて、レウコテアのヴェールを巻いて海に飛びこんだ。この様子を見たポセイドンは、オデュッセウスはそのように苦しみながら海上をさ迷いつづけるのだと言って、自分の住居へ帰った（五、二八二―三八一）。

ポセイドンがひきあげると、ただちにアテネが、北風以外の風をさえぎり、オデュッセウスが、死をのがれ、パイアクス人の土地に着けるように、大波をくだいて彼のために行く手を切りひらいてやった。オデュッセウスは、まる二日間波間を漂流し、三日目の朝になって陸地を認めた。だが彼が、岸に近づくと、岩礁と断崖があるばかりで、港も入江もなかった。彼は、大波によって岩に打ちつけられ、死ぬのではないかと思った。そのときアテネが、陸地に目をむけながら海上を迂廻するようにオデュッセウスに暗示した。この暗示にしたがって彼が泳いでいくと、ある川口に近づいた。彼は、そこで陸にあがるのがよいと思ったので、救いをもとめる自分を哀れんでくれと川の神に祈った。すると川の神は、流れをとどめ、波をしずめて川口へ彼を助けいれた。この川口に泳ぎついた彼は、激しい疲労のために気を失ったが、正気にもどり、レウコテアのヴェールをはずして川に投げた。すると流れがそれを海に運び、レウコテアはヴェールをうけとった（五、三八二―四六二）。

オデュッセウスは川床からあがると、川岸の葦のなかに伏して大地に接吻しながら、川岸で夜をすごすと寒さに耐えられないし、木立のなかで眠れば、寒さはしのげ、疲れもなくなるだろうが、野獣の餌食になるかもしれないと迷った。しかし彼は、後者のほうがよいと思い、川の近くのオリーブの繁みの下にはいこみ、体を多くの木の葉で蔽った。するとアテネは、オデュッセウスの激しい疲れをすぐにいやすように、彼を眠らせた（五、四六二―四九三）。

ながくなったが以上がオデュッセウスのオギュギア出発からスケリア到着までの苦難の概略である。これを見れ

ば、ポセイドンが、彼の留守中にオデュッセウスの帰国が神々によって決められたことを知り、オデュッセウスをできるだけ苦しめようとしたこと、だがオデュッセウスがレウテコアおよびアテネの助力によって苦労しながらも無事にスケリアに到着したことを、第二の神々との関連から、自然に理解できるだろう。

ところがこの場面に関しても、分析論者たちは矛盾した箇所を指摘し批判しているのである。なかでもシュヴァルツ[9]は、まずアテネの助力（五、三八二―三八七）に関して、それはほとんど効果のないものである。というのはオデュッセウスは、定まった方向もなしに二日二晩漂流し、彼が陸地を見るまでに、しばしば死を予感した（五、三八八―三九三）と語られている。（シュヴァルツのいう）原者作＝Kが、このように拙劣に語ったということは不可能であろう。したがって三七五の ide de から三八七までの箇所は、（シュヴァルツの見なす）改作者＝Bによって挿入されたものであると見なしている。これにたいしてフォッケ[10]は、三八八―三八九からは、オデュッセウスがあちらこちらへと押し流されたとは理解できない。むしろ kymati pēgō plazeto という表現は、たんに大波に打たれながら押し流されたと解すべきである。つまり大波のうねりが彼にかぶさり、彼を引っさらい、波の上にあげたり波間にさげたりしながら、陸地の方向へと流していったと見なされうるのである。したがって三八八―三八九は、アテネの介入と矛盾していないし、三七七におけるポセイドンの言葉 aloō ともうまく対応しているとフォッケは主張している。

このフォッケの主張を、リューター[11]、アイゼンベルガー[12]が支持している。とくにリューターは、一歌の第一の神々の会議におけるオデュッセウスを帰国させる（一、二二―二六）という決議、またオデュッセウスは苦難をうけてスケリアに着き、そこで名誉と贈物を得て帰国するのだ（五、三三―四二）という五歌の第二の神々の会議におけるゼ

ウスの言葉、さらにはポセイドンの怒りとの関連から、今述べたアテネの介入を不可欠なものと見なし、この介入によってオデュッセウスの運命の変化が現実のものに――もちろんまだこの段階では、オデュッセウスはアテネの助力を意識していない――なりつつあると見なしている。

なお分析論者であるフォッケが、ポセイドンが去り、アテネが介入して、オデュセウスを陰から助けている場面のみをとりあつかっているのにたいして、リューターがさきに述べたように、一歌から五歌までの筋の展開から見て、五、三七五―三八七におけるアテネの助力を必要なものと見なしている点は、フォッケよりもすぐれていると言える。[13] しかしリューターが、アテネの介入が前後の場面との関連あるいはこれまでの筋の展開からして矛盾していないと述べている主張も、その根拠をしぼっていくと、結局五、三八八―三八九の解釈、とくに三八九の plazeto つまり plazō の未完了過去三人称単数受動相をどういう意味にとるかという点にあるのである。それ故リューターが、さきに紹介したフォッケの意味のとりかたを支持しているのも当然である。ところがシュヴァルツ、シャーデヴァルト、[14] アマイス[15]などの分析論者は、彼（オデュッセウス）が大波によってあちこちと押し流されたという意味にとり、三七五―三八七と矛盾していると言っているのである。たしかに plazō には、人をあちこちさまよわせるとか、正しい進路から離れさすという意味があり、[16] 分析論者たちは、これの受動相の意味にとっていると思われる。しかしこれらの意味を記している辞書も、まず第一にあげているのは、打つ、叩くという意味であり、とくにリドル・アンド・スコットは、この五、三八九の plazeto は plassō からきていることを指摘している。さらにエーベリング[17]も、この五、三八九の plazō の意味を pulso,ferio にとっているのである。したがって plazō を打つ、叩く、つまり plazeto を打たれる、叩かれるという意味にとれば、kymati pˉgō plazteo（五、三八八―三八九）は、彼（オデュッセウス）は大波によっ

て叩かれるいう意味になり、三八八―三八九の二行も、「そこで彼は二日二晩大波によって叩かれ、しばしば死ぬ思いをした」という意味になるのである。そして問題の二行が、この意味であれば、この二行とアテネの介入（五、三七五―三八七）は矛盾していない。というのは、なるほどオデュッセウスは、大波に叩かれ、死ぬような苦しみをうけたが、風はアテネの介入によって北からのみ吹き、そして波は陸地にむかって進んでいるのであるから、この結果、彼が陸地の見えるところまで流されたというのは、不自然ではないと言えるからである。

なおこのように二日二晩苦難をうけたうえ、さらに彼はスケリアの土地にあがるのにアテネの助けをうけながらも非常な危険をおかさねばならなかったのである（五、三九二―四六四）。そのために、彼は、上陸後疲労のあまり裸のままオリーブの繁みのなかで、落葉をあつめて眠ったのもやむを得なかったと見なしうる。またこのように見てくると、このあとに続くナウシカとオデュッセウスの特異な出会いも、筋の展開の上から見て無理なものではないと思える。それ故さきにあげたアテネの介入を不可欠とするリューターの見解は、妥当なものと言ってよいだろう。

2　オデュッセウスのスケリア到着とナウシカ物語

I

五、三六―四二におけるゼウスの言葉によってすでに伏線が敷かれていたオデュッセウスのスケリア到着後のパイアクス人による受けいれは、アテネの介入によって（六、一―三一五）、まずナウシカとオデュッセウスの出会いに

より実現された。[18] この点をとらえてナウシカ物語がテレマコス物語と対応しており、両者とも王家の血をひく若者であり、アテネに訪問され、彼女の指示をうけてオデュッセウスを助けることになるが、この事件の進展が、筋の展開を複雑かつ興味をますものにしており、両物語とも現形の「オデュッセイア」の作者自身により独創的に創作されたと見なしている学者[19]がいる。この見解は説得力があり、われわれを同意させうる。なおテレマコス物語とナウシカ物語のみならず歌手ペミオスとデモドコス、ペネロペイアとアレテの類似性と対照性も、イタカとスケリアの明確な関連をしめしているが、パイアクス人物語の「オデュッセイア」にたいする関係は、初めと終りにある中間的なものとしてのみではなく、「オデュッセイア」全体の中間、つまり漂流と帰国、メルヘンと現実、神の生と人間の生の中間を意味していると、リューターは言っている。[20] このリューターの見解にもわれわれは同意しうる。

だが、現形のテクストに即して五歌から六歌へかけての筋の展開を見ていくと、ナウシカの役割についてリューターの見解とは別の見方がなしうると思われるのである。アテネの介入によるとは言え、ナウシカも言い、オデュッセウスも肯定しているように、たしかに彼女がオデュッセウスを助け（八、四五七―四六八）、彼の帰国のための助言も与えている（六、三〇三―三一五）。しかし五歌において、オデュッセウスがカリュプソのもとを去ってきたのはなぜだったのか。それは、もちろんオデュッセウスが帰国するためである。ところが、彼の帰国とは、具体的に言えば、たんに彼が祖国の土を踏むだけではなく、彼の妻ペネロペイアのもとにもどることを意味している（五、二一五―二二四）。しかもカリュプソが、長年オデュッセウスを自分のもとにひきとめていたのは、彼の故郷の親しい人々を忘れさせ、彼を不老不死にして自分の夫にするためであった（一、四八―五九、五、二〇三―二一三）。言いかえれば、「オデュッセイア」の主題は、オデュッセウスの帰国であり、それは、彼が部下たちを救けて帰国しようと努

力したが、彼らの無法の故に神の怒りをかい、彼らはすべて破滅し、オデュッセウスのみがカリュプソの島に助けられ、しかもカリュプソの求愛をしりぞけ、横暴な求婚者たちによって苦しめられている彼の妻ペネロペイアと再会することである。この彼の帰国をさまたげているのは、言うまでもなく、ポセイドンの怒りであるが、七年間もオデュッセウスをとどめ、彼の帰国を実質的にさまたげ、結果的にポセイドンの味方をしているのはカリュプソなのである。つまり彼女のオデュッセウスにたいする求婚が、彼の帰国を妨害しているのである。一方彼の故郷では、貴族の若者たちが彼の妻に求婚し、彼女は苦境にある。このように「オデュッセイア」の筋が進展しはじめる時の状況設定は、夫のオデュッセウスはオギュギアでカリュプソの求婚に苦しめられて帰国できず、妻のペネロペイアはイタカで貴族たちの求婚に苦しめられているというふうに見事な対応をなしている。

以上のように見てくれば、「オデュッセイア」の基底には、人間は自己の無法（atasthaliai）によって破滅するという思想があると同時に、求婚（mnēstys）ということが、オデュッセウス夫妻の再会を妨害する原因にされていることがわかるだろう。

II

こういう作者の構想を考慮しながら、ナウシカ物語を検討しよう。まずアテネの介入であるが、どうしてアテネはナウシカを選び、彼女にオデュッセウスをパイアクス人の町に案内させようとした（六、一一二―一一四）のであろうか。ナウシカは、オデュッセウスを帰国させうるパイアクス人（六、三七）の王アルキノオスの娘であり、カリュプソとは対照的な処女で結婚に憧れており、しかも彼女との結婚を望んでいる貴族たちをもっているのだから、パイ

アクスたちの間に彼女の悪評がたたないようにという理由で、彼女に洗濯にいかせ、彼女とオデュッセウスの出会う機会をアテネがつくろうとしたの（六、四四―一一八）は、納得のいく介入と言えるだろう。[24] しかもすでにここで王女の結婚と彼女にたいする貴族たちの求婚という問題も、とりあげられているのである。

ところでさきに述べたような立場と状況下にあるナウシカが、帰国を願うオデュッセウスにどのように対応し、また裸のオデュッセウス（六、一三六）が彼女とどのような出会いをして、彼女の好意を得るようになったのかを見てみよう。

ナウシカが結婚に、つまり立派な夫をもつことに憧れをいだいており、しかも父アルキノオスがこの娘の気持をすでに察している。もちろん母親も娘の気持を知っていると思われる。このように娘の結婚への憧れの気持を察している両親の許可を得て、川にきたナウシカは、洗濯をしたあとでオデュッセウスと会うわけである。ところで海で汚れ、裸でいる自分がライオンのように恐ろしい姿をしていることを自覚しているオデュッセウスが、、彼女の膝にすがりついて嘆願し、彼女をこわがらせるよりも、彼女から離れて言葉で嘆願し、彼女の心をつかもうとしたのも自然の成り行きであろう（六、八五―一四八）。だが同時にここで、ライオンの比喩を使用することにより、恐ろしい姿をしたオデュッセウスが、どのような言葉でナウシカの心を得ようとするのかという興味を聴衆にいだかせる巧みな手法を、作者はしめしていると言えるだろう。

ではオデュッセウスは、ナウシカの心をどのようにしてつかもうとしたのであろうか。彼は、ナウシカを結婚を望む年頃の処女であると見て、彼女の美をたたえ、彼女の幸福な結婚を祈り、家庭の円満こそすばらしいと主張することによって自分の知的レベルをしめすと同時に、自分は恐ろしい姿をしているが、実は哀れな状態にあるのだと述

べ、衣服を与えてくれるように嘆願したのである（六、一四九―一八五）。このようにライオンのような姿をした裸のオデュッセウスから知的な言葉が語られ、裸でいる事情も納得のいくように説明されると、彼の姿が野蛮であればあるほど、彼の知的な言葉は、かえって聞くものに強い印象を与えるのは容易に理解しうるだろう。オデュッセウスに以上のような言葉を語らせ、野獣と知という対照によってナウシカの心をつかませようとした作者の手法は、なかなかすぐれていると言える。[22]

さて裸のオデュッセウスの嘆願を聞いたナウシカは、彼に人間の知性を認め、嘆願者には不自由させぬと言ったうえ、彼女自身はパイアクス人の王アルキノオスの娘であることを明かし、女中たちを呼びもどしてオデュッセウスを水浴びさせ、彼に飲食物を与えるよう彼女らに命じた。女中たちは、ナウシカの言いつけどおりにした。だがオデュッセウスは、美しい処女たちの前で下半身を露にするのは恥ずかしいから、離れてほしいと言った（六、一八六―二二二）。つまり彼は、このように彼女らに頼むことによって、野獣のような姿をしていても、人間としての羞恥心をもっていることをしめし、彼女らにもよい印象を与えたと言えよう。

したがって水浴し、衣服を着たあと、アテネにより美しくされてもどってきたオデュッセウスを見たナウシカが、より強く彼に好意をいだき、彼のような男の人が自分の夫になってほしいという気持を女中たちに打ち明けるようになった（六、二二三―二四六）のも不自然ではないだろう。そしてオデュッセウスが食事をしたあと、ナウシカが彼を町へ案内していくが、そのとき、彼女は、彼が自分たちから離れてついてくるようにと言い、その理由として、無分別な者に、彼女が漂流してきたよそ者を夫にするつもりだと言いふらされ、それが彼女の恥になることをあげている（六、二四七―二八八）。これはパイアクス人の王女である彼女にとっては、もっともな理由であるが、同時にこ

の理由を述べることは、オデュッセウスを夫にしたいという彼女の気持すなわち彼女の求婚を、控え目に間接的に表現することになっていると言えるのではなかろうか。

III

こうして彼女が、オデュッセウスへの愛情を、さきにあげた理由を述べることによって告白した以上、彼女にはこの告白にたいする彼の反応を見る以外に方法はないのである。しかもよい反応を得ようと思えば、彼女はできるだけ彼に好意をしめさなければならないだろう。そして彼に好意をしめすこととは、彼のもっとも望んでいること、つまり彼の帰国を助けることなのである。ここに、つつましい処女ナウシカが、彼女の愛と、その愛情の故に、自分の思いとは逆の行動をとらねばならないというつらい立場におかれたことがわかるだろう。しかし彼女は、オデュッセウスが早く帰国できるには、彼が館の広間にはいって彼女の母の膝を抱くことだと、帰国にとって重要なことをすすんで彼に教えるのである（六、二八九―三一五）。このように見てくると、ナウシカ物語においては、愛するもののために、自分の気持とは正反対の行動をとらざるを得ないナウシカの苦しい恋が、淡々と描かれており、それ故にかえって深く聴衆の胸を打つのではなかろうか。またオデュッセウスのほうは、彼にたいする彼女の愛情を察知し、彼女をいとしく思いながらも最愛の妻ペネロペイアのもとに帰る決意を変えなかった。このことは、後でナウシカの気持をよく推察する彼女の父アルキノオスが、オデュッセウスにナウシカの夫になってほしいが、その意志のない彼をパイアクス人たちはひきとめはしないと（七、三一二―三一六）、オデュッセウスに言っていることからも推定できるだ

ろう。

以上のことから、六歌においては、オデュッセウスの知とナウシカの愛情が、オデュッセウスを救い、彼を帰国させることになるのだが、一方オデュッセウスを救い、彼と結婚したいという気持、すなわち彼に求婚しようという意志をもっている可憐な処女ナウシカを振り切って帰国するオデュッセウスの心も、痛んだであろうということが推察しうるのではなかろうか。要するにこの場合には、ナウシカの求婚は、結果的にはオデュッセウスの帰国を早めると同時に、彼の心を苦しめていると言えるだろう。したがってカリュプソの求婚が、長い間オデュッセウスの帰国を遅らせ、オギュギアを出発するさいに彼女の心を悲しませても彼の心は痛まず、むしろ彼を帰国途上の苦難に喜んでたちむかわせたのに比較すると、ナウシカの彼にたいする求婚は、彼の帰国を早めはするが、彼と彼女の双方に別れのつらさを味あわせたのである。しかしオデュッセウスは、この求婚による苦しみを克服することにより、帰国することができ、求婚者たちによって苦しめられている妻ペネロペイアを救い、彼女と再会することができたのである。それ故、オギュギアとイタカの中間スケリアにおけるナウシカは、オデュッセウスの帰国と彼にたいする彼女の求婚という点から見て、カリュプソが濃厚な愛と執拗な求婚によって彼の帰国を阻んだのとは、対照的な役割を演じていると言えるだろう。

3　アレテの対話およびオデュッセウスのスケリア滞在

さて、七歌におけるオデュッセウスがアルキノオスの館に着いたときになされたアルキノオスおよびアレテとオデュッセウスの対話を読めば、一見何の不自然もなく筋が展開しているようである。だが、この場面においても、分析論者たちは、矛盾を指摘している。たとえば、シャーデヴァルト[23]は、ナウシカやアテネによってアレテの好意をうけるように助言されたオデュッセウス（六、三一三―三一五、七、七五―七七）が、彼女らの指示どおりに行動した（七、一三九―一五二）のに、アレテは何の反応もしめさず、あとになって（七、二三三―二三九）はじめてオデュッセウスに、彼が誰で衣服を誰に貰ったのかと尋ねており、七、一四八―二三二を筋の展開上無用な部分で、改作によって挿入されたと見なしている。またキルヒホフ[24]は、オデュッセウスが、アレテによって尋ねられた内容、つまり彼が誰で、衣服を誰に貰ったのか（七、二三八）ということのうち、彼が誰であるかということに答えていないのは、不自然であると批判している。

この二人の分析論者の批判は、非常に鋭く、分析論の正しさを証明しているように思われる。しかし彼らの批判は、はたしてあたっているのであろうか。

まずシャーデヴァルトの意見から検討してみよう。彼の言うところは、要するにオデュッセウスの嘆願にたいするアレテの反応が遅すぎ、しかもその間に無用なものが挿入されているということである。このように指摘されると、アレテの反応が遅すぎるばかりでなく、その反応がオデュッセウスの嘆願にたいする彼女の返答ではなく質問であること、またアレテの好意をうけることがオデュッセウスの早い帰国の条件であるのに、シャーデヴァルトによって改作者の挿入と見なされている部分においても、アルキノオスが彼の帰国のイニシァティブをとっている（七、一八六―一九六）ように見えることが奇異に思われるのである。

ベッスリヒは、[26]統一論の立場からパイアクス人たちが二度にわたって沈黙し、アレテも黙ったままでいるのは、何も不自然なことではないと見ている。その理由は、オデュッセウスが広間へ姿を見せずにはいり、アレテの膝に抱きついて姿を現わしたのだから、皆が黙り、彼を見て驚いたのも当然であり（七、一四五）、オデュッセウスがアレテに救助をもとめ、帰国できるようにしてほしいと嘆願したのにたいしても皆がやはり黙っている（七、一五四）ことは、より重要なことであり、ナウシカとアテネがアレテの好意をうけるように前もって助言している（六、三一三―三一五、七、七五―七八）ことが、アレテの沈黙を明白かつ目立つようにしており、彼女の意見表明を聴衆に待ちどおしく思わせて、この意見表明にたいする期待が高まれば高まるほど、彼女の沈黙がより強力なものとなり、彼女の発言力を強めるものになっていると見なしている。

パイアクス人たちとアレテの沈黙に関しては、以上のベッスリヒの解釈に同意しうる。だが、シャーデヴァルトが挿入と見なしている部分の内容（七、一四八―二三八）とその前後関係の矛盾、およびキルヒホフの指摘したアレテの質問（七、二三八）とそれにたいするオデュッセウスの返答（七、二四一―二九七）に関する矛盾については、統一論的に解釈されていない。そこで七、一四八―二三二の内容とその前後との文脈を検討してみよう。まずその内容であるが、オデュッセウスが、アレテに帰国の嘆願をしているのに、アレテが返答せず、彼女のかわりにアルキノオスと他のパイアクス人たちが意見を述べているのである。もちろんアレテが沈黙していること自体については、すでに紹介したベッスリヒの解釈によって解決されたと見てよいだろう。しかし内容と文脈におけるナウシカおよびアテネの助言とアルキノオスおよび他のパイアクス人たちの発言の矛盾は、どのように解決されるべきなのだろうか。

まず長老エケネオスがオデュッセウスを椅子に坐らせて食事させるようにと発言したことである（七、一五五―一

六六）が、分析論者たちは、この発言自体もおかしいと見なしているようである。そしてその理由は、アレテが返答すべきであるのに、彼が発言しているということにあるらしい。しかし前後関係から言ってオデュッセウスがアレテに嘆願したからという理由で、彼女が彼にたいして最初に返答しなければならないという批判はあたらないのではないか。たしかにナウシカもアテネも、早く帰国するにはまずアレテに嘆願し彼女の好意をうけるようにとオデュッセウスに助言している。それ故彼の嘆願をうけた彼女が、どのように反応をしめすかは、聴衆に関心をひかせるところであろう。しかもベッスリヒの言うように、彼女の沈黙が聴衆の関心をより大きくする効果をあげている。言いかえれば、沈黙も効果の大きい一種の反応形態と言えるだろう。ところで彼女が沈黙していることが、オデュッセウスの嘆願にたいして好意をしめしていることになるのかそれとも敵意をしめしていることになるのだろうか。エケネオスがオデュッセウスの取り扱いについて助言を与えた相手はアルキノオスであり、アルキノオスも、またこの助言をうけて、オデュッセウスを嘆願者として処遇し、彼を帰国させるよう提案すると、オデュッセウスが、それに応じてアルキノオスおよび他のパイアクス人たちにもう一度自分を早く帰国させてくれるように懇願し、パイアクス人たちも、この懇願をうけいれてやるように言っているのである。このように広間にいるパイアクス人たちは、アレテに嘆願したオデュッセウスの帰国の問題に関して発言しており、それも好意的に発言しているのである。そしてこの間すくなくとも彼女は、オデュッセウスに敵意をもっていないか、あるいは冷静に彼らの対話、とりわけオデュッセウスの言動を見まもっていたと言えるだろう。さらにエケネオスが、嘆願をうけたアレテに助言せず、アルキノオスに助言しているのを不自然に思う人もあるだろう。だがアレテは、アルキノオスをはじめ他のパイアクス人たちに神のように尊敬され、聡明で男たちの争いをもおさめる女性である（七、六九―七四）。このようなアレテに、エケネオス

が、助言しうるだろうか。もしそのようなことをすれば、彼自身が不遜な行動をとったとパイアクス人たちから逆に非難されるだろう。それ故彼が、アルキノオスに助言したのは当然であり、その結果アルキノオスがオデュッセウスと対話したのも自然の成り行きと見てよいだろう。では、どうして直接嘆願をうけているアレテが、ただちにアルキノオスの役割をはたさなかったのだろうか。ここで注意すべきことは、アレテがたとえアルキノオスや他のパイアクス人によって尊敬されていようとも、彼女は王妃であり、パイアクス人たちの王はあくまでアルキノオスで、彼によって集会が招集され、そこで彼の意見が述べられ、それが出席者の同意を得ると、実行に移されているということである（七、一八六―二〇六、七、二二六―二二七、八、四―五、八―一一―一四、八、二六―四五）。しかもアルキノオスの意見は、集会においても王の言葉として決定的な力をもっていると見なしうる（七、三一七―三一八、八、三四―四五）。

このように見てくると、なるほどアレテは、パイアクス人たちに神のように尊敬されており、夫にたいしても大きな影響を与える力をもっているが、聡明な彼女自身は、あくまで王妃の立場を心得ており、夫にかわって王として振舞うようなことはなかったのである。では、アレテは、どのようにしてオデュッセウスに好意をしめし、アルキノオスに影響を与えているのだろうか。このことは、彼女が、沈黙しているということによってしめされているのである。つまりアルキノオスとオデュッセウスが対話し、パイアクス人たちがアルキノオスの提案とオデュッセウスの嘆願をうけいれている間、彼女が黙っていることは、彼女が王妃の立場をまもっていると同時に、アルキノオスをはじめ他のパイアクス人たちの意見にすくなくとも反対の意向を表明していないということ、すなわちオデュッセウスの早い帰国にとにかく同意しているということを意味しているのであり、結果的にはオデュッセウスに好意をしめし

ているということになるだろう。[26]

II

ところで他のパイアクス人たちが去り、広間にアレテとアルキノオスそれにオデュッセウスの三人だけが残ったとき、彼女は、自分でつくった衣服をオデュッセウスが着ているのに気づき（七、二三四―二三五）、オデュッセウスが誰であり、彼の衣服は誰から貰ったのか、彼は漂着したと言わなかったかと、オデュッセウスに尋ねた。この彼女の質問が、オデュッセウスの彼女への嘆願後における彼女の最初の具体的な発言である。アレテが、アルキノオスの提案を明確に支持するのではないかと期待していた聴衆は、この発言によって、アレテが、オデュッセウスを詰問して彼を困らせる立場にたたせており、彼女はオデュッセウスに好意的でないのではないかという印象をうけるかも知れない。

だが前後関係から見て、かならずしもそうとは言えないと思うのである。というのは、これまでアルキノオスや他のパイアクス人たちが、オデュッセウスを帰国させることに同意し、アレテも好意的な沈黙をまもってきたのであるが、三人だけになったとき、アレテも女性であり、年頃の娘ナウシカの母親であるから、オデュッセウスに好意をもちながらも、衣服に気づいて、漂着したオデュッセウスとナウシカの関係を知りたく思い、衣服を誰に貰ったのかとオデュッセウスに尋ねて、沈黙を破ったのもやむを得ないことだろう。一方オデュッセウスのほうも、ナウシカとの出会いを述べて嘆願者にたいする彼女の立派な振舞いをほめたたえ、彼女が衣服を与えてくれたことを打ち明けて、見事な返答をした。この返答にたいして、アルキノオスは、ナウシカがオデュッセウスを館に案内しなかったことを

非難したが、この非難にも、オデュッセウスは、彼女をかばった上手な返答をしたのである。そこでアルキノオスは、オデュッセウスの返答に心を打たれ、彼のような男性を彼女の夫にしたいと言うが、彼が帰国を望むなら、翌日帰国させると断定的にオデュッセウスに言った。これを聞いたオデュッセウスは、自分が帰国できるようにという願いを表明した。この対話に応じて、アレテは、女中たちに寝床を用意させ、オデュッセウスに就寝するようにすすめたのである。したがってアレテの質問も、沈黙を正当化し、彼に好意的なものでなく、彼を冷たく詮索し、試し、彼に説明を要求しているものであるというアイゼンベルガーの見解[27]は是認できない。アレテの質問は、さきに述べたように年頃の娘をもった母親が娘の相手の男性に好意をいだきながらも、あくまで娘とその男性とがどのような関係にあるのかを知りたいと思う気持からなされたものであると見るほうが自然なのではなかろうか。

ところで分析論者キルヒホフの批判、すなわちアレテによってなされた質問（七、二三八）のうち、オデュッセウスが誰であるのかということにたいして彼が返答していないのは、不自然であるという点について、統一論的にどのように反論しうるのだろうか。

まずアレテの質問を詳しく見て見よう。彼女は、オデュッセウスに、「あなたは誰で、どこの人々の土地からこられたのですか。誰がこの衣服をあなたに与えたのですか。あなたは海を漂ってここに到着したと言われなかったのですか（七、二三八―二三九）」と尋ねている。ここで指摘しうることは、この質問は、年頃の娘をもつアレテの立場からすれば、彼女が、オデュッセウスに好意をもちながらも、母親として、娘のためになしてもけっして不自然なものではないが、オデュッセウスの立場からすれば、彼が、彼女の好意と母親としての立場を理解しながらも、いや理解するが故に、アテネとナウシカから受けた助言にしたがい、この質問にたくみに答えて、アレテの彼にたいする

好意を確実なものにしようと努力するのも自然の成り行きだろうということである。

ところで上記のアレテの質問にたいして、オデュッセウスは、彼女の好意を得るために、どのように答えているのだろうか。彼は、まずアレテの関心がナウシカと自分との関係にあり、したがって彼女の質問の核心が自分の着ている衣服にあることを推察したと思われる。つまり（七、一五二から推測して）オデュッセウスは漂着した[28]と言っており、しかもアレテの手になる衣服を着ているのだから、彼は、その衣服を洗濯にいったナウシカに貰ったのに違いないとアレテに思われており、この点をアレテに納得のいくように、しかも彼女の好意をより確実にするようにうまく説明しなければならないと判断したと見てよいだろう。[29]そしてこの判断にもとづき、オデュッセウスは、アレテに、カリュプソに救われてからスケリアに到着するまでの苦難（七、二四一―二八三）を語り、「どこの人々の土地から来たのか（七、二三八）」、「海を漂ってここに到着したと言わなかったか（七、二三九）」というアレテの質問に詳細に答えて、衣服に関する返答の前提を十分に整えると同時に、自分が単なる漂流者ではなく、部下をもっていた一軍の将であることを示唆している（七、二五一）のである。この点、彼が、すでにアルキノオスに、自分の領地、召使たち、大きな館を見れば、死んでもよい（七、二二四―二二五）と言っていることとあわせ考えると、彼は、身分も高く部下をも有している男であることを主張していると言えるだろう。[30]さらに彼が、カリュプソに七年間ひきとめられ不老不死にしてやると言われても、心を変えなかった（七、二五五―二五八）と述べているのを考慮すると、彼は、女神の誘惑にもまけず、ただ一途に彼の故郷、彼の家族、とくに彼の妻を思いつづけていたことを暗示していると見うるだろう。しかも彼は、ナウシカとの出会いにおいて、彼女が年若いのに立派に振舞い、漂着した自分に衣服を与えてくれた（七、二九一―二九六）と言い、「誰がその衣服を与えたのか（七、二三八）」というアレテの問

いに答えながら彼女をたたえているのである。以上のように見てくると、要するにオデュッセウスは、娘を思うアレテの気持を察知し、彼女の質問の核心をとらえて、自分が身分もあり部下も有し、故郷を思い妻を恋いしたっている男であり、ナウシカも彼にたいして立派な振舞いをした女性である――もちろん彼はナウシカの好意を感じていたであろうが[51]――ことを述べ、彼とナウシカの間には何のやましい関係もはいりうる余地のないことを指摘して、アレテを安心させるとともに、彼女の好意を確実なものにしようと意図したと言えるだろう。事実この意図にもとづく説明の結果、アレテは、夫のオデュッセウスを送還するという意見に反対するどころか、オデュッセウスのために、女中たちに寝床の用意をさせ、彼に、就寝するようにすすめて、好意をしめしているのである。

ところが、アレテの質問のうち、「あなたは誰ですか（七、一三八）」という問いに、オデュッセウスは、結局答えないままであった。しかしこれまで見てきたところからわかるように、オデュッセウスは、アレテの質問の核心が彼とナウシカの関係にあると見抜き、アレテの疑惑と不安を除き、彼女の自分にたいする好意をより強くして帰国を確実にできるようにするのが、彼にとっては先決であり、そのために彼は、自分の有名な名前をあえて名乗らなかった と見ることができるのではないか。一方、アレテも、衣服のことから娘とオデュッセウスの関係に疑問をもった故、質問したのであり、しかもこの疑いが氷解した以上、さらにオデュッセウスのことについて詮索する必要はなくなったと言えるだろう。それ故、オデュッセウスが、アレテの質問のうち、「あなたは誰ですか（七、一三八）」との問いに答えていないのも不自然ではないと主張しうるだろう。なお聴衆の側から言えば、オデュッセウスは翌日帰国することになっているのであるから、それまでにはいずれにしろ彼の正体はあきらかになるのであるが、それがいつ、どのようにしてあきらかになるのであるかということ、またあきらかになれば、どうして彼が神のようにパイアクス人

たちにあがめられ、どのようにして多くの贈物を得て送られる（五、三六―四〇）のかということに関心をいだくだろう。したがってこのような聴衆に与える効果を考えて、オデュッセウスにアレテの「あなたは誰ですか（七、二三八）」との質問に答えさせなかった作者は、この場面において巧みな手法をしめしていると言える。[32]

III

ところでアルキノオスに翌日の帰国を確約してもらったオデュッセウスは、翌日すぐに送り返してもらったのだろうか。事実はそうでないのである。彼はアルキノオスたちにもてなされる一方、彼も自分の漂流をパイアクス人たちに語ったため、彼の滞在は一日ながびいているのである（八、一―一三、八四）。

ところで分析論者たちは、オデュッセウスの滞在期間について検討し、現形の「オデュッセイア」を批判している。たとえば、シュヴァルツ[33]は、オデュッセウスのスケリア滞在の一日目の話を原作者の、二日目を改作者の、三日目をさらに別の改作者の手になっていると見なしている。またフォン・デル・ミュール[34]は、一日目を原作者の、二日目、三日目の話を改作者の手になっていると見ており、フォッケ[35]は、一日目、二日目を原作者の、三日目の話を後代の作者の手になっていると言い、シャーデヴァルト[36]は、一日目と三日目を原作者の、二日目を改作者の手になっており、彼によってオデュッセウスの漂流物語が挿入されたと主張している。これらの分析論者の主張の根拠は、こまかい点でそれぞれ違っているが、まず第一には、シャーデヴァルトを除いて、他は一三、一八―三五においてはオデュッセウスが何もすることなく、いたずらに日の沈むのを待っているだけであり、このような状況は不自然であるという点、つぎに、シャーデヴァルトを含めて、七、三一七―三一八においてアルキノオスがオデュッセウスを翌日に送り返す

と約束しているのに、オデュッセウスの滞在が一日のびて、三日目に送られているのは、このアルキノオスの約束を配慮せずに改作者が手を加えたために生じた矛盾であるという点にあると見ることができる。

だがオデュッセウスのスケリア滞在が一日のびたのは、はたして不自然なことだろうか。ここで分析論者たちが批判している点を検討して見よう。改作者が翌日オデュッセウスを送り返すという約束（七、三一七―三一八）を無視して手を加えたために、滞在が一日のびたということと、帰国の日にオデュッセウスが、ただいたずらに日没をまっているのは不自然であるということが分析論者たちのおおよその主張である。ところでいま仮りに改作者の手が加えられずに、約束どおり翌日に送り返されているとして見よう。その場合、オデュッセウスは翌日をどのように過ごしたと見うるだろうか。まずここで言えることは、(1)八歌におけるように、パイアクス人たちの集会において、オデュッセウスの送還が決定され、このあと宴会が催され歌人デモドコスが歌い、つぎに競技がなされてオデュッセウスの技量が賛嘆され、さらにパイアクス人が得意とする踊りがなされ、デモドコスもアレスとアプロディテの密通の物語を歌い、アルキノオスがオデュッセウスへの贈物を提案し、皆がそれに同意したあと、オデュッセウスは入浴し、その際ナウシカとの短い別離をなして、再び宴席につき、そこでまた有名な木馬の話をデモドコスが歌うのを聞いたあと、オデュッセウスは、アルキノオスの質問に自分の素姓をあかし、パイアクス人たちによって送られるというふうに翌日の晩まで過ごしたか、(2)一三歌のように翌日をパイアクス人たちの宴席に座りながら、オデュッセウスは、自分の素姓をあかして船が出発する日没をまちこがれて過ごしたということのいずれかであろう。

というのは、アルキノオスがオデュッセウスの送還を約束している言葉を見ると、「あなた（オデュッセウス）が、明確に知るように、わたし（アルキノオス）は送還を明日のこの時刻と決める（七、三一七―三一八）」となってお

り、前後関係から見て、「この時刻 (es tod') (七、三一七)」とは、夜の就寝する時であり、「明日(aurion es)(七、三一八)」と関連して翌日の夜を意味していると見るべきだろう。[37] したがって、オデュッセウスには、翌日の夜まで時間的に余裕があり、この時間を彼がどのように過ごすかが、筋の展開に関連してくるのは当然のことであろう。ところでいま指摘したように、七歌の末尾においてアレテとアルキノオスがオデュッセウスに好意をいだき、アルキノオスがオデュッセウスの送還を翌日の夜と決めるが、それには翌朝におけるより多くのパイアクス人の長老たちによる相談が前提となっている(七、一八六―一九六)ようである。[38] しかしこの箇所をよく見れば、オデュッセウスを送還するかどうかを相談しようとアルキノオスが提案しているのではなく、オデュッセウスを喜ばせ、無事に、速やかに、何の苦労も受けさせずに護送すること、つまり送還を当然のこととして、その方法を相談しようと提案しているのである。[39] それ故、アルキノオスが、このあとでオデュッセウスの送還の時期を決め、彼に告げているのも矛盾したことではないと言える。したがってオデュッセウスが翌日の夜送還されると仮定すれば、それまでの彼の過ごしかたには、いろいろあるだろうが、やはり、現形の「オデュッセイア」からは、さきにあげた二通りの過ごしかたが、もっとも自然なものと見てよいだろう。いずれの場合にも、客人に親切なパイアクス人たち、とりわけオデュッセウスに好意をもつアルキノオスが、彼を手厚くもてなす様子が描写されており、一応そこに七歌からの自然な筋の展開を見ることができるのである。ただ前者の場合には、そのもてなしが非常に詳しく描写され、後者の場合には、もてなしがきわめて簡潔にしかもオデュッセウスの日没すなわち出発の時を待つ強い気持をまじえて語られているという点で相違があるだけである。

IV

このように見てくれば、分析論者が指摘するように、さきにあげた(1)あるいは(2)の場面のいずれを選ぼうと、オデュッセウスはスケリアに二日間滞在するだけで十分であり、アルキノオスの約束どおり送還されてよいのではないかと思える。だがそうすればまた疑問が生じてくるのである。その疑問は、まず七歌において、オデュッセウスはアレテの質問にたいして自分の名前をあかさず、送還される前にあきらかにすることになるが、なぜ前もって名乗らなかったのかということ、つぎにオデュッセウスは、二日間の滞在で十分であるのに、現形の「オデュッセイア」のように、なぜ三日間滞在したのであるかということである。

前者の疑問に関しては、オデュッセウスが名前を名乗らなかったことが、後者の疑問に関連していると思われるので、簡単にそのいきさつを述べておこう。アルキノオスの館で、彼をはじめ他の貴族たちに好意をもたれたオデュッセウスに、アレテは、自分の娘ナウシカと彼との関係に不安をいだき、彼が誰で、どこから来たのか、また誰にその衣服を貰ったのかと尋ねた。オデュッセウスは、この質問にたいして名前をあかさず、しかも一人の漂着者として見事な返答をなして、アルキノオスを感心させ、彼に送還の時期を約束してもらうとともに、アレテをも安心させたのである。だがオデュッセウスの名前があきらかにならなければ、彼は送還してもらえないのであるから、彼が、いつどのようにして自分の名前をあきらかにするのか、またゼウスが予言しているように、彼はパイアクス人たちからどのようにして多くの贈物を得て送られる（五、三六―四〇）のかということも説明されなければならないだろう。ところがこれらの事情は八歌を中心として述べられているオデュッセウスのスケリア滞在から推察しうるのである。す

なわち翌朝の集会において、アルキノオスのオデュッセウスを送還するという提案が王たちに同意され、若い丈夫な船の漕手たちも選ばれ、アルキノオスの館の広間で宴が催され、歌人デモドコスがこの宴席で、トロイアでのオデュッセウスとアキレウスの争いについて歌ったとき、オデュッセウスは人に気づかれぬよう涙を流したが、アルキノオスのみはそれに気づき、競技をするよう命じた。この競技でオデュッセウスは控え目な態度をとりながらも円盤投げにおいて彼の卓越した技量をしめし、弓術においてもトロイアで自分よりすぐれていたのはピロクテテスだけだと言った。以上のような事情があきらかになってくると、パイアクス人たち、とりわけアルキノオスは、彼の客人がトロイア戦争に関係したすぐれた勇士であると推察していると見てよいだろう。そしてこのような勇士に、アルキノオスがパイアクス人たちのすぐれた点をしめそうとしたのも自然の成り行きである。アルキノオスは、競走と航海、歌と踊り、衣類と風呂と睡眠がパイアクス人の誇れるものだと言い、歌と踊りを命じた。デモドコスは、アレスとアプロディテの密通[40]の話を歌い、アルキノオスの二人の息子ハリオスとラオダマスは、見事な踊りを見せた。これを見たオデュッセウスは、アルキノオスに、彼らのすぐれた踊りをほめたたえたので、アルキノオスは喜び、オデュッセウスに贈物をすることを提案し、他のパイアクス人たちも賛成した。そこでアルキノオスも館にもどり、アレテに、オデュッセウスへの贈物をし、彼を入浴させ、食事を与えるように言った。こうしてゼウスの予言の一部は実現されることになる。そしてオデュッセウスは、入浴したあと、ナウシカと短いが心のこもった別れの言葉をかわして宴席にもどった。このことは、アルキノオスの約束どおり、その夜、宴会のあとオデュッセウスが送還されることをしめしていると言える。

だが宴席にもどったオデュッセウスが、デモドコスにトロイアを滅亡させた木馬の話を歌ってもらうと、涙が彼の

目から流れ、頬をぬらしたので、アルキノオスは、これに気づき、デモドコスが歌いはじめてから、オデュッセウスは悲嘆をやめないので、歌をやめよう、しかしオデュッセウスが誰であり、故郷がどこであるか、またなぜ涙を流して悲しんだのか教えてほしいと言った。そこではじめてオデュッセウスは、自分の名前と故郷をあかし、トロイアからスケリアまでの苦難をパイアクス人たちに語ったのである。そしてこのオデュッセウスの物語は相当長く、現形の「オデュッセイア」においても九歌から一二歌にまでおよんでいる。

それ故アルキノオスが送還を約束した日の夜のうちに、オデュッセウスが語りおえなかったのも当然だろう。またオデュッセウス自身も、死者の世界での体験話の途中で、彼の会った英雄の妻や娘たちの名前をあげて、彼女らのことを語っていたら夜があけてしまうから船に乗るか寝床にはいるべきだと提案しているのである。だがまずアレテが、オデュッセウスをひきとめて、話をつづけてほしいと言い、彼のためにさらに贈物をふやすように提案すると、エケネオスがアルキノオスにその裁断をもとめた。アルキノオスは、アレテの言うとおりにするよう決定し、オデュッセウスは帰国を熱望しているだろうが、自分らが贈物をしおわる明日まで辛抱してさらにとどまってほしいと言った。つまりオデュッセウスにもう一日滞在を延長するようにアルキノオスが要請したのである。そこでオデュッセウスは、アルキノオスの要請をうけいれ（一一、三二七―三六一）、死者の世界で出会ったトロイアの戦友の話をしてくれるようにというアルキノオスの要望に応じて、アガメムノンやアキレウスなどの霊に会った話、さらにその他の物語を話しつづけ、最後にカリュプソに救われたことを述べ、物語を語りおえたのであるが、そのときには、すでに夜はおそくなっていたのである。

V

以上のように見てくると、七歌におけるアレテの質問に、オデュッセウスが、あえて自分の名をあかさず、八歌においてデモドコスの歌や競技によって次第に自分に関係することを通じて自分が何者であるかを暗示していき、送還の時がちかづいてきたときには、きわめて自然に自分のほうから木馬の物語を歌ってもらい、その結果アルキノオスが、彼の素姓と苦難を尋ねるようになっている経緯がわかるだろう。つまりオデュッセウスの行動を中心に考えると、彼は、七歌で、アレテに名前を尋ねられたときには、彼女がより関心をもっていることに返答して、自分の名前をあかすことをさけ、むしろのその返答における彼のすぐれた知恵や振舞によって彼女の疑惑をとき、彼女とアルキノオスの好意をうけるように努力し、八歌では、競技によって自分の技量をしめし、トロイア関係の歌で涙を流して、八歌末尾から九歌の冒頭にかけてタイミングよく送還前に名前をあかし、そのためにトロイアからの漂流を物語らざるをえなくなったのである。しかも彼は、自分の名前をあかし、自分の経験を語ることによって彼自身の主体性をとりもどしているのであり、この点から見ても、以上の筋の展開は不自然ではないと言える。

また一一歌の半ばで、話もすすみ夜も更けたとき、オデュッセウスが話を一度打ち切り、帰国を熱望している彼が、パイアクス人の気持をくんで、控え目に、船へいくか、寝床にはいる時間ではないかと提案しているのも、アルキノオスとの約束の関係から見て、至極当然のことであろう。そしてアレテやアルキノオスが物語をつづけるよう頼み、贈物をふやすと言うと、彼が、これをうけいれ、語りおえたときには、夜が更けてしまっていたのも自然の成り行きだろう。

したがって五歌のゼウスの予言や七歌のアレテの質問との関連からオデュッセウスのスケリア滞在を見ると、アルキノオスのオデュッセウス送還約束を前提としても、一三歌冒頭のオデュッセウスの滞在描写のほうに、矛盾がなく、前後関係の一貫性がよりよく認められるのである。またアルキノオスの送還約束がまもられなかった事情も、不自然でないことがわかるだろう。

なおオデュッセウスが、話を一旦打ち切っている場面も、彼が多くの有名な女性の名をあげているところで、しかもそれらの名をすべてあげていると際限がなく、ついには夜があけてしまうと、彼自身が言っているとおりである。だから聴衆にとっては、これらの名前をながながと聞いているのは退屈なことであり、ここでオデュッセウスの提案をきっかけにして、アルキノオスに死者の世界でオデュッセウスが出会ったトロイアの戦友の話をしてくれるようにと言わせているのは、オデュッセウスの話に再度聴衆の興味をおこさせる点でも、作者のすぐれた手法をしめしていると言ってよかろう。

だがこのように見てくると、一三歌冒頭の場面においてオデュッセウスが、スケリア滞在三日目を、日没を待っていたずらに時間を空費しているだけだという分析論者の批判にたいしても、統一論者の立場から反論しなければならないだろう。ところで分析論者の批判は、主としてアルキノオスが自ら贈物を船に運んだり、彼の広間で宴会が催され、その席でオデュッセウスが日没を待っている（一三、一八―三五）描写にたいしてなされている。たとえば、フォッケは、アルキノオスが贈物を自分で船に運びいれているのは、王としてふさわしくない行動であると非難しており[41]、メルケルバッハは、三日目のことに関しては、改作者にはもはや何も語るすべはなく、オデュッセウスは晩になるのを渇望していると言って不自然だと見なしている[42]。

しかし分析論者が批判するように、三日目の経過がはたして不自然なものであろうか。まず一三、一―一七においては、オデュッセウスが歌人のように見事に（一一、三六八）語りおわると、アルキノオスが、オデュッセウスはこの地からの帰国において二度と漂流するようなことはないし、衣類や黄金などの贈物はすでに箱におさめられているが、さらに追加の贈物（一一、三四〇、三五一―三五二）として各人が三脚台と水盤を贈ろうと言い、皆のものはそれに賛成し家に帰って眠ったと述べられている。それを見るとアルキノオスは、一一、三四七―三五三において、オデュッセウスに約束したとおりに実行しようとしていることがわかるだろう。

このあと夜があけると、彼ら（王たち）は追加の贈物を船にもってきて、それをアルキノオスがうけとり船の中へ注意深く運びいれた（一三、一八―二二）と述べられている。フォッケが、このアルキノオスの行動を非難しているのは、さきに記したとおりである。また八歌においては王たちがオデュッセウスへの贈物をアルキノオスの館にとどけるさいには、家来に持ってこさせており、それをアルキノオスの息子たちが受けとってアレテのそばにおいており、このように贈物の持参の仕方の相違もフォッケの指摘しているところである。しかし八歌の状況と一三歌冒頭の状況を比較してみよう。八歌ではアルキノオスや王たちはオデュッセウスとともに、戸外で競技や踊りを見ており、その戸外でアルキノオスによってオデュッセウスへの贈物が彼の館にとどけられるようにという提案がなされると同時に、館の広間における夕食への招待が、オデュッセウスや王たちにたいしてなされたのである。それ故王たちがアルキノオスのあとにしたがって館へいき席につく一方、家来たちに贈物をとどけさせ、それをアルキノオスの息子たちがうけとってアレテのそばにおいているのは、不自然なことではなく、この場合にはやむを得ない処置と言えるのではなかろうか。いやこの場合でもアレテは、自分で倉から立派な箱をもってきて、王たちの贈物とアルキノオス夫

婦の贈物をいれて、オデュッセウスに繩をかけるように言っているのである。したがって一三歌において、オデュッセウスが語りおわったあと、家に帰った王たちが夜があけてからもってきた追加の贈物をアルキノオス自身が船に運びこんでいることは、おかしなことではないだろう。現に一五、九九―一三〇において、メネラオスは妻のヘレナと息子のメガペンテスとともに宝庫へいき、息子に白銀の混酒器をもってくるように言い、ヘレナは彼女自身が作った立派な刺繍の長袍を選んで、テレマコスのところへいき、メネラオスが自分で混酒器をテレマコスに手渡し、ヘレナも自ら長袍を彼にわたしているのである。だから客人への贈物の世話を王や主人が自分でするのは、一般的なことであったと見てよいのではないかと思える。

ところで一三、一八―三〇に関してメルケルバッハは、さきに指摘したように、改作者はもはや語るすべを知らないときめつけている。ところが一八―二二については、いま述べたところと重複しているので説明を省略するが、要するにアルキノオスは王として当然なすべき客人への贈物の世話を自らなしているのである。またそのあと広間で、アルキノオスは他の王たちとオデュッセウスを中心にした宴席をもうけて食事をし、デモドコスに歌を歌わせて宴をもりあげているが、オデュッセウスは帰国を切望して日が沈んでくれればよいと太陽の方へたびたび目をむけている様子（二三―四〇）が描写されているのである。つまり、帰国の時を待つ客人のために主人がそれまでの間を退屈しないよう心を尽くして歓待しているのであるが、待ちきれずにいるオデュッセウスの気持を作者は印象的に語っていると言えるだろう。しかも作者は、三一―三五において、畑仕事をしている男が、太陽が沈むと夕食にありつけるのを喜ぶようにオデュッセウスは日没を有難がったと、巧みな比喩で彼が帰国できる時がきたのを喜ぶ気持を表現することによって、オデュッセウスをして自分を無事に送り返してほしい（一三、三九）とアルキノオスに願いでる伏線

を敷いているのである。だからアルキノオスが、オデュッセウスの申し出に同意し、別れの杯をかわして、彼を送り出しているのも自然な経過であると見てよいだろう。[43]

以上のように見てくれば、分析論者たちが批判しているのも、つまりオデュッセウスのスケリア滞[44]在が本来一日か二日であるはずなのに改作者によって三日にのばされていると主張しているのも不当な非難であり、むしろアルキノオスがオデュッセウスの送還を翌日にすると約束して以後の経緯はきわめて自然であり、オデュッセウスの滞在が一日延長されたのは不自然ではないと言える。

4　オデュッセウスの漂流物語

――ネキュイアについて――

オデュッセウスの漂流物語は、九歌から一二歌にわたってアルキノオスの館でパイアクス人たちに、オデュッセウス自身によって語られ、そのためにオデュッセウスの送還が一日延長されるのであるが、このことはこれまでに述べたとおりである。また彼の漂流物語の内容に関しても、すでに（同志社外国文学研究一五、一六号）において大部分ふれており、ここであらためて論じないことにする。ただ一一歌については、テイレシアスの予言を中心に述べているだけであるから、一一歌のまだ論じていない部分について以下に述べていきたい。

ところで一一歌は、分析論者たちによって批判され、改作者によって挿入されたか手を加えられたものと見なされているが、ネキュイアに述べられているテイレシアスの予言やアガメムノンの話、さらにはアキレウスの気持など

は、「オデュッセイア」の筋の展開から見て、けっして矛盾していないと主張しうる。[45]

だが太古の女性たちと英雄たちの霊は、エルペノル、アンティクレイア、テイレシアス、アガメムノン、アキレウス、アイアスなどの霊に比較すると、オデュッセウスと深い関係にないのに、ここに列挙されているのは不自然であると、分析論者たちに批判され、この部分は本来別箇に存在していたのが改作者の手によって挿入されたものであると見なされている。[46]

しかし太古の女性たちや英雄たちの霊が現在の形において現われているのが、分析論者たちによって批判されているように不自然であろうか。統一論者アイヒホルンも指摘しているように、死者の世界はこの世を去った者たちの大きな溜め池であり、その死者たちのなかには、とくにわれわれの興味をひく太古の偉大な男たちや女たちももちろんいるわけであり、したがって死者の世界の包括的な情景を聴衆につたえようという意図を作者がもっているならば、オデュッセウスが関係した個々の人物の霊だけでなく、太古の人間たちの霊をも聴衆に知らせるのは、当然のことであろう。ただアイヒホルンが、太古の女性たちの霊についてオデュッセウスが語っているのは、アレテの好奇心を満たして彼女への敬意をしめそうとしているのであるとだけ見ているのには同意できない。[47]

アレテがオデュッセウスの話に興味をもったことは、オデュッセウスが話を中断したとき、彼女が最初に発言し、すぐにはオデュッセウスを送還せず、彼への贈物をふやすように（一一、三三九―三四〇）と提案していることからもあきらかであろう。だがアレテは、彼女の提案直前に同席のパイアクス人たちに、オデュッセウスの姿や身の丈それに思慮深い心をどのように思うか（一一、三三六―三三七）と、彼らも彼の話に賛嘆しているのを前提とした質問をしているところからして、彼女は、同席のパイアクス人たちと同様に、九歌から一一歌の三二七行にいたるオデュッ

セウスの話に興味をもち、彼に話をつづけてもらいたいという気持をいだいたと見るほうが自然であろう。

しかしどうして作者は、オデュッセウスに太古の女性たちの霊をここで語らせたのであろうか。ここでまず言えることは、オデュッセウスがテイレシアスに帰国に関することを聞いたあと、彼の母親アンティクレイアの霊に会い、彼女から彼女の死の理由と彼女が死んだ当時の故郷の状況を聞いているのは、自然な成り行きであるということである。そして母親としてまた女性としてのアンティクレイアから彼の妻ペネロペイアにも帰国後に話せるように、ここでのすべてのことに注意するようにと言われている故、ハデスの妃ペルセポネイアによって送られてきた太古の女性たちの霊にもあっているのは、たとえ彼女たちがオデュッセウスと関係なくとも、不自然ではないだろう。[45] いやむしろオデュッセウスに関係のない女性の名前を際限なく述べていくという状況をつくることにより、彼に話を中断する口実をもうけさせ、夜がすでに更けており、自分を送還してもらうか、皆が就寝する時刻であると申し出る（一一、三二八―三三三）機会を彼に与えるという巧みな筋の展開を作者は意図していると見ることができるだろう。[46]

ところで太古の女性たちは、オデュッセウスと関係がないと述べてきたが、すべての女性たちが彼と全く無関係であるわけではないのである。たとえばテュロはポセイドンとの間にネレウスを生んでおり、またネレウスは美しいクロリスとの間にオデュッセウスの戦友ネストルとクロミオスやペリクリュメノスと美しいペロを生んだ。この娘のペロを、ビアスは、弟の予言者メラムプスの助けによって、妻にしたのであるが、このメラムプスは、テレマコスがピュロスを出発する際自分の船に同乗させたテオクリュメノス（一五、二五六）の曽祖父になるのであり、しかもメラムプスは、さきのテュロとその夫クレテウスの子アミュタオンの子になるのである。またレダはゼウスとの間にヘレナとカストルおよびポリュデウケスを生み、テュンダレオスとの間にはクリュタイムネストラを生み、前者はメネ

ラオスの妻、後者はアガメムノンの妻となっており、ヘレナのためにオデュッセウスをはじめ多くのギリシア人が災厄をうけたのである。さらにテュンダレオスの兄弟イカリオスの娘がオデュッセウスの妻ペネロペイアなのである。したがって以上二人の女性は、オデュッセウスおよび「オデュッセイア」にでてくる人物と関連をもっていると言える。なおこのような関連がなくとも、伝説上有名な人物の先祖になる女性や人物の妻たちの名があげられている。たとえばアンティオペはゼウスとの間にアムピオンとゼトスを生んだが、彼ら二人は、後にテバイの創設者となったと言われている。そしてかの有名なテバイの王オイディプスの母であると同時に妻でもあったエピカステ（イオカステ）の名もあげられている。また有名なヘラクレスをゼウスとの間に生んだアルクメネ（二、一二〇）とヘラクレスの妻メガラの名が述べられている。さらにポセイドンとの間に巨人のオトスとエピアルテスを生んだイピダメイア（イピメディア）やミノス（一七、五二二、二四、一七八）の娘でテセウスの妻になる前にアルテミスに殺されたアリアドネ、後に彼女のかわりにテセウスの妻となったアリアドネの妹パイドラやアテナイ王エレクテウスの娘で夫ケパコスの貞節を疑って夫に殺されたプロクリス[51]の名がでてきている。なおアムピオン、ゼトスとともにテバイを築いたとも言われているロクロスをゼウスとの間に生んだマイラ、メラムプスによって性的不能を治癒されたイピクロスの母クリュメネやポリュネイケスに買収されて夫アムピアラオスをテバイ攻めに参加させたエリピュレなどの名が挙げられている。

以上のように見てくると、太古の女性たちの名が、無意味に羅列されているのではなく、オデュッセウスに何らかの関係があるか、有名なテバイ伝説、ヘラクレス伝説、テセウス伝説などに関係する女性たちの名がうまく説明的にあげられていることがわかるだろう。ところでオデュッセウスが、このように女性のことを述べれば際限がないと言

うと、アレテとアルキノオスが、オデュッセウスにさらに語りつづけるように頼み、アルキノオスが、オデュッセウスの戦友に会った様子を語ってくれるように言っているのも納得のいくことである。しかもオデュッセウスが、アガメムノン、アキレウス、アイアスに会ったこと、とくにアガメムノン自身がアイギストスとクリュタイムネストラに殺害された状況を語り、自分の悪辣な妻にたいする気持をあきらかにしていることを述べているのは、ネストルやメネラオスのアガメムノン殺害に関する話を補充している役割をはたしていると見なせるだろう。

またこのあとの太古の英雄たちの霊の話、すなわち、まずオデュッセウスがイタカに着いた後、彼がアテネやエウマイオスにクレタの出身者だといつわっているそのクレタの王ミノスの霊にはじまり、巨人オリオン、大地の子ティテュオス、アガメムノンの祖先タンタロス、ゼウスの秘密をあばいたシシュポスなどの霊の様子、さらにはヘラクレスの霊との対話やテセウスとペイリトオスの霊にもうすこしで会えたことをオデュッセウスが述べているのは、女性たちの霊の話と均整のとれた叙述であると言えるだろう。

以上のように見てくれれば、太古の女性や男性たちの霊に関する話は、分析論者たちの批判するような不自然なものではなく、前後との関係およびオデュッセウスの話の中断との関係から見ても、筋の展開には何の矛盾するところも見あたらず、むしろ有機的な関連があると言えるのではなかろうか。

注

① A. Kirchhoff, Die homerische Odysee, Hildesheim, New York, 1973, 197.

② U. v. Wilamowitz, Die Heimkehr des Odysseus, Berlin, 1927, 1.

③ W. Schadewaldt, Der Prolog der Odyssee, Harvard Stud. Class. Phil., 63, 1958, 15 ff.

④ Cf. F. Klingner, Studien zur Griechischen und Römishen Literatur, 1964, 68; F. Focke, Die Odyssee, Stuttgart-Berlin, 1943, 74.

⑤ 求婚者たちが、オデュッセウスに罰せられるべき罪をおかしている点については、同志社外国文学研究一九・二〇合併号一九七八年、京都、拙著「『オデュッセイア』における求婚者たちに対する神々の怒り」参照。

⑥ Cf. S. Besslich, Schweigen—Verschweigen—Übergehen, Die Darstellung des Unausgesprochenen in der Odyssee, Heidelberg, 1966, 152 ff.; K. Rüter, Odysseeinterpretationen, Göttingen, 1969, 90.

⑦ カリュプソとキルケはよく比較される。たとえばラインハルト(K. Reinhardt, Von Werken und Formen, Godesberg, 1948, 96 ff.) は、キルケは魔女であり、魔法の飲物と杖で人間を豚に変える力をもっていたが、ヘルメスの助力を得たオデュッセウスにその魔力をやぶられ、彼と一年間の愛欲生活を送った。しかし部下たちの願いにより、彼らを帰国させるという使命感を強くもつオデュッセウスに（これは「オデュッセイア」の主題であるが)、自分らを帰国させてほしいと頼まれると、彼女はまずハデスへ行きテイレシアスの予言を聞くよう助言をあたえた。一方カリュプソはニンフであり女神である。彼女は魔法の力をもっていないが、愛する人間を不死にする力をもっており、彼を不死にして一緒に暮らそうという言葉やその美しい姿でオデュッセウスを誘惑しようとしている。しかもこの場合オデュッセウスはただ一人であり、故郷のペネロペイアを恋いしたっているのである。そして彼は人間として、人間である自分の妻ペネロペイアを選び、女神の求愛をしりぞけていると言っている。Cf. R. Harder, Kleine Schriften, München, 1960, 148 ff.

⑧ Cf. H. Güntert, Kalypso, Halle, 1919, 158 ff.; 拙著「カリュプソの悲しみ」架稿、二号、一九六八年、京都、参照。

⑨ E. Schwartz, Die Odyssee, München, 1924, 10 f.

⑩ Focke, 84 f.

⑪ Rüter, 230 f., Anm. 5.

⑫ H. Eisenberger, Studien zur Odyssee, Wiesbaden, 107, Anm. 3.

⑬ Cf. M. Müller, Athene als göttliche Helferin in der Odyssee, Heidelberg, 1966, 68 f.

⑭ W. Schadewaldt, Homer, Die Odyssee, Übersezt in deutsche Prosa, Hamburg, 1958, 72.

⑮ Ameis-Henze-Cauer, Homers Odyssee, Leipzig, 1897. 5, 389, Anm.

⑯ Liddell & Scott, Greek-English Lexcon, new edition, 1961; Menge-Güthling, Enzyklopädisches Wörterbuch der grieschen und deutschen Sprache, Griechisch-Deutsch, Berlin, 1955; R. J. Cunliffe, A Lexicon of the Homeric Dialects, Glasgow and Bombay, 1963², plazō.

⑰ H. Ebeling, Lexicon Homericum, Hildesheim, 1963, plazō

⑱ Cf. Eisenberger, 109 f.

⑲ Rüter, 222 ff.; Eisenberger, 109.

⑳ Rüter, 246.

㉑ Cf. Eisenberger, 109 f.

㉒ Cf. Focke, 106 f.; Eisenberger, 110; H. W. Clarke, The Art of the Odyssey, New Jersey, 1967. 52 f.

㉓ W. Schadewaldt, Kleiderdinge, Hermes, 87, 1959, 13 ff.

㉔ Kirchhoff, 279.

㉕ Beßlich, 143 ff.

㉖ Cf. Focke, 126 ff.; Eisenberger, 113 f.

㉗ Eisenberger, 114.

㉘ Ameis, 7, 239, Anm.

㉙ Cf. Beßlich, 61.

㉚ Beßlich, 64.

㉛ 六′ 二四四—二四五′ 二五四—三二五参照。

㉜ Cf. Beßlich, 62 ff.; U. v. Wilamowitz, Homerische Untersuchungen, Philologische Untersuchungen 7, Berlin, 1884,

133 f.; Focke, 108 f., 130 ff.; R. Merkelbach, Unterschungena zur Odyssee, München, 1969, 165 f.; Schwartz, 21 f.; Schadewaldt, Kleiderdinge, 13 ff.; Eisenberger, 110 ff.; W. Mattes, Odysseus bei den Phäaken, Frankfurt / Main, Würzburg, 1958, 130 f.

㉝ Schwartz, 40; Merkelbach, 168.

㉞ Von der Mühll, Pauly-Wissowa, Real-Enzyklopädie der classischen Altertumswissenschaft, Supplmentband VII, 696 ff.

㉟ Focke, 153 ff. はオデュッセウス物語の作者あるいは原作者をO、後代の作者すなわちテレマコス物語の作者をTとし、Tが本来の作品に手を加え、さらに後の編集者が手を加えたと見ている。

㊱ Schadewaldt, Die Odyssee, Übersetzt, 329 ff.; Schadewaldt, Von Homers Welt und Werk, 375 f.; Mattes, 12 f.

㊲ Ameis, 7, 317-318, Anm.; Mattes, 74 f.; Cf. W. B. Stanford, The Odyssey of Homer, 2 vols, London, 1954, 329, Comm. 7, 317-318.

㊳ Ameis, 7, 188-192, Anm.

㊴ Mattes, 95.

㊵ このデモドコスの歌は、一見、人間世界とは無縁な神々の世界の事件を、競技のためにこわばった空気をなごやかにすると同時に、宴席の人々とりわけオデュッセウスを喜ばせるために面白おかしく歌っているようである。だがその内容をよく見ると、ヘパイストスを夫にもつアプロディテとアレスが密通し、それを知ったヘリオスがヘパイストスに告げると、ヘパイストスは復讐を決意し、自分の寝床に罠を仕掛けて、二人の神々の密通の現場をとりおさえ、にげられないようにして、神々に、アプロディテとアレスが自分の寝床で密通しており、恥知らずな女のために出した結納品を彼女の父親が返すまでは、彼ら二人を罠からはなさないだろうと言うと、女神たちは恥ずかしがってあらわれず、集まった男の神々の一人が、足の速い者(アレス)が足の遅い者(ヘパイストス)に捕えられているとは、悪いことはうまくいかないもので、密通の罰金は払われねばならないと言った。他の神々も、このようなことを話して笑ったが、ポセイドンが、アレスに償いを払わせる保証人に自分がなると言って、ヘパイストスに彼ら二人を自由にさせたのである。要するにこれは、夫をもつ女性が愛人と密通し、罰を受けるという話である。そしてこの話は、神々の世界での事件を題材にしているが、その内容は、不義とそれにたいす

る罰についてであり、アイギストスとクリュタイムネストラの密通が罰をうけたことや、またオデュッセウスの妻ペネロペイアに不当に求婚している求婚者たちにたいする罰の予兆や予言などとも共通性があると言える。それ故作者は、この箇所においても、オデュッセウスが帰国後求婚者たちにたいして復讐することを、神々の世界のおかしい事件を通じて示唆していると言えるだろう。Clarke, 55; Thornton, 44 f.; cf. Eisenberger, 123 f.; Mattes, 97, Amm. 2.

㊶ Focke, 153.

㊷ Merkelbach, 168.

㊸ Cf. Mattes, 17 ff.

㊹ 「オデュッセイア」におけるパイアクス人の土地スケリアの位置に関しては、古くからいろいろな説が述べられている。以前は、つまりナウシトオスの時には、パイアクス人たちは、ヒュペレイアと呼ばれる広い土地に住んでいたが、キュクロプス人たちに迫害され、ナウシトオスは、そこからパイアクス人たちを労若に耐えて働く人間たちから遠くはなれたシケリアへと移住させ、町に城壁をめぐらし、神殿を建て、畑を分配した。その後を継いでアルキノオスが王となっていた（六、四―一二）と言われている。ところでヒュペレイアが何処であるかについては諸説があり、古注（六、四）によれば、シシリーのカマリナであるとか、キュクロプス人たちの土地の近くの島であると言われており、ビュザンチオンのステパノス(ethnika, Argos) によると、アルゴスであると見なされている。またアマイス (Ameis, 6, 4, Anm.) は、ヒュペレイアはスケリアの北の方にあると言っている。しかしここにあげたいずれの説にも、確実な根拠は見あたらない。しかもアマイスはヒュペレイアがスケリアの北にあると言っているのだが、肝心のスケリアが何処にあるのかが、わかっていないのである。そもそもオデュッセウスの漂流が地中海のイタリアおよびシシリーの周辺においてなされたということが、不確実なのである (Polybios in Strabo, 1, 73 ff., 85 ff.)。それ故スケリアがシシリーであるという主張にも信頼をおき難いと言えるだろう。だがこのような見解を近代においても支持する学者たち、たとえばポッコック(L. G. Pocock, Reality and Allegory in the Odyssey, Amsterdam, 1959, 19, 25 f., 31) やバトラー (S. Butler, The Authoress of the Odyssey, London, 1929, 163) などがいる。ポッコックは、オデュッセウスの冒険中に登場する神・怪物・人物を、フェニキアの勢力を比喩的にしめしているか、あるいはフェニキア人たちであることをやはり比喩的に表現していると見なしているようである。二、三の例をあげると、ポセイドンはフェニキアの海軍を象徴し、キルケ、カリュプソはフェニキアの海軍力が彼らの島まで勢

力をのばしており、ポリュペモスは、シシリーのモテュアに生まれ育ったフェニキア人を意味しているのであり、要するにオデュッセウスが、漂流中滞在しあるいはひきとめられていた島々は、フェニキア人の海軍基地であり、オデュッセウス物語は、フェニキア海軍に隠れて作られており、したがって比喩的なカムフラージュが、非常に巧妙になされているのであるとポッコックは見ているのである。だがこの見解にも確かな根拠は見られない。

なお、スケリアはコルキュラ（Korkyra）すなわち現在のコルフ（Korfu）であるという見解をとっている学者たちもいる。この見解の根拠になっているのは、トゥキュジデスが、コリントス人たちの一部がコルキュラに移住する以前そこに住んでいた人間が航海にすぐれたパイアクス人であると述べており（Thūkyd., 1, 25）、またそこにはゼウスと「オデュッセイア」におけるパイアクス人たちの王アルキノオスの聖域があったと記している（Thūkyd., 3, 70）ことである。さらにコルキュラ近くの岩礁は、オデュッセウスを送還して帰ってきたパイアクス人の船が、ポセイドンの呪いによって、石に化したものであるということ（Eustath., 1737, 36）や、ドラパネ、スケリア、コルキュラといった名前の変化の説明などによって（Eustath., 1521, 30）、スケリアはコルキュラすなわち現在のコルフと見なす意見もある。

ところで以上のようにスケリアをコルフと同一視する見解は、いまなお好意をもたれているとスタンフォード（Stanford, commentary, 6, 8.）は言っている。だがスタンフォードは、反論をくわえてはいないが、この見解を容認しているわけではない。それ故、これまでの見解、すなわちスケリアがコルフであるとかシシリーであるという意見にたいする反論の根拠を見てみよう。まず「オデュッセイア」においては、さきに述べたように、ナウシトオスがパイアクス人たちをひきつれて「労苦に満ちた人間たちから遠くはなれたスケリアに移住した（六、八）」と言われている。ナウシカも「わたしたちは、このうえもなく遠くはなれて、波立つ海のなかに住んでおり、他のいかなる人間もわたしたちのところへは近づかない（六、二〇四―二〇五）」と述べている。さらにオデュッセウスが、カリュプソの島から大熊座の星を左手に見ながら航海し、一八日目にスケリアが彼の視野にはいった（五、二六九―二八一、七、二六七―二六九）と語られている。だがこのようなオデュッセウスの航海の方法と日数から、スケリアの位置を決定することはできない。というのもカリュプソの島は、オデュッセウスのこのような航海の方法やヘルメスの言葉（五、五四―五五）から、はるかかなたの西方にあるということが推測しうるぐらいで、島の位置そのものは、わからないのである。したがって位置のわからない島をよりどころにして、航海の方法や日数によってスケリアの位置を決定することができないのは当然だろう。そのうえ六、八、六、二〇四―二〇五によ

ってスケリアは、他の人間たちから遠くはなれた海の中にあると言われているのだから、現在のコルフやシシリーと同一視することはできないだろう。

ではスケリアは如何なる島で何処にあると見るべきなのだろうか。オデュッセウスが、トロイアからイタカへ帰国する途中に出会う冒険は、むしろ災厄と言うべきものであろう(一、一―一〇)。そして彼の努力の目的は、部下たちとともに生きて故郷に帰ることなのである。だが残念ながら、部下たちはすべて漂着した島々や、海上において死んでしまい、最後にはオデュッセウスのみが、カリュプソの島に漂着し助けられたのである。その島で彼は、カリュプソに愛され、七年間も彼女の夫になることを求められた。しかしオデュッセウスは、この求婚をしりぞけ、あくまで帰国を望んだのである(五、一一六―二二四)。

以上のことは、オデュッセウスにその意志があれば、不老不死になって自分の妻より美しい女神カリュプソとともに永遠の青春を享受しうるのに、それを拒否し、人間として生きるのをオデュッセウスが望んでいることを意味している。というのは、不死の身になり、神として女神とともに暮らすことは、人間社会を捨てることであり、人間としては死ぬことになるのである。それ故オデュッセウスは、不死すなわち死の誘惑をたえず受けながら、その強い意志によって生きつづけようとしたのであり、生の尊厳を彼の行動によって、作者はしめそうとしたのであろう(注⑦参照)。

このように見てくると、カリュプソの島は西方の遠い世界の果てにあり、スケリアの位置も、六、八や六、二〇四―二〇五から、すこしは人間の世界に近づいてはいようが、他の人間たちは近づかないきわめて遠くはなれた海の中であると言えるだろう。言いかえれば、パイアクスたちは、平和で豊かな人間社会の生活を営んでいるが、舵のない速い船で遠くまで夜のうちに航海することや、他の人間たちから遠くはなれたところに住んでいることから、古注六、八の主張するように、作者の想像による土地と見るべきではなかろうか。また不死の女神のもとから、つまり死のもとから不思議なしかし平和で豊かな人間社会へオデュッセウスが到着したということは、現実の人間社会に復帰する中間点に彼が着いたということを意味していると解釈してよいのではないかと思われる(Cf. W. H. Roscher, Ausführliches Lexicon der griechischen und römischen Mythologie, Hildesheim, 1969, 2208–2211 ; Stanford, commentary, 6, 8.)

㊺ オデュッセウスが、テイレシアスの霊から帰国について聞いたあと、トロイアで戦死した英雄たちにあったとき、英雄アキレウスは、死者たちの王であるよりも、農奴として生きていたいものだという意味の言葉(一一、四八九―四九一)を述べて

いる。これは、オデュッセウスがアキレウスの霊を賛えて、アキレウスは生きているときは神のようにあがめられ、死んでも死者たちの王であり、幸福な人だという意味のこと（一一、四八二―四八六）を言ったことにたいする答えである。つまり生きていることが、いかにすばらしいことであるかが強調されているのである。したがって作者は、不死よりも生を、死よりも生を重んじるべきだと言っている（注⑧参照）のである。しかし作者は、死者のアキレウスが言っているように、農奴でも、いいかえればどのような生き方をしても、生きているほうがよいという思想の持主ではない。このことは、アキレウスの霊が、オデュッセウスに自分の息子ネオプトレモスのことを尋ねて、息子が将軍となるように戦いにくわわったが、どうであったか（一一、四九二―四九三）と言ったのにたいして、オデュッセウスが、ネオプトレモスは、戦術を謀ったときでも的確なことを述べ、戦いにおいても先頭にでて多くの敵を倒し、木馬のなかでも平然としており、トロイアの町を滅ぼしたあと、すばらしい分け前をうけて、無傷で帰国の船に乗った（一一、五〇六―五三七）と答えると、喜んで去っていったという描写がなされていることからわかるだろう。つまり作者は、死よりも生を重んじてはいるが、単に生きるだけではなく、名誉を得て生きることに価値を認めているのである。

㊻ Wilamowitz, Homerische Untersuchungen, 143 ; Focke, 218 ff. ; Merkelbach, 189 ; D. Page, Homeric Odyssey, Oxford, 1955, 46.

㊼ Eichhorn, 76, Anm. 54.

㊽ 一一、三三六―三四〇における文脈から、このような解釈は可能であると思う。Ameis, 11, 336, Anm.

㊾ Focke, 218 f. ; cf. Ameis, 11, 223, Anm.

㊿ Eisenberger, 177. なおアレテが、オデュッセウスの申し出にたいして、最初に発言しているのは、太古の女性たちの霊の話が結果として女性である彼女の関心をひいたと言えよう。

(51) オデュッセウスの祖父アクリシオスはケパロスの子か孫であるとも言われている。